

OP12-4 p-N因子別にみた術前化学療法の外科学治療成績(一般口演12 術前術後補助療法(1), 世界をリードする呼吸器外科医に!, 第23回日本呼吸器外科学会総会)

著者	遠藤 俊輔, 坪地 宏嘉, 大谷 真一, 手塚 憲志, 手塚 康裕, 長谷川 剛, 佐藤 幸夫, 塚田 博, 村山 史雄, 蘇原 泰則
雑誌名	日本呼吸器外科学会雑誌
巻	20
号	3
ページ	819
発行年	2006-05-15
権利	日本呼吸器外科学会
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00134218">http://hdl.handle.net/2241/00134218</a>

## OP12-4 p-N 因子別にみた術前化学療法の外科治療成績

<sup>1</sup>自治医科大学大宮医療センター, <sup>2</sup>自治医科大学呼吸器外科

遠藤 俊輔<sup>1</sup>, 坪地 宏嘉<sup>1</sup>, 大谷 真一<sup>2</sup>, 手塚 憲志<sup>2</sup>,  
手塚 康裕<sup>2</sup>, 長谷川 剛<sup>2</sup>, 佐藤 幸夫<sup>2</sup>, 塚田 博<sup>2</sup>, 村山 史雄<sup>2</sup>,  
蘇原 泰則<sup>2</sup>

【背景・目的】近年, 肺癌に対する術前化学療法は進行例だけでなく, 切除可能だが予後不良な比較的早期の症例に対しても行われようになった。どの進行度の肺癌症例に術前化学療法が効果的かを探るため, 当科において術前化学療法後完全切除し得た肺癌症例の治療成績を pN 因子による進行度に応じて検討した。【対象】1994 ~ 2000 年までの自治医大呼吸器外科グループ (栃木本院と大宮分院) において, 臨床病期 III 期で術前化学療法を施行後, 完全切除し得た非小細胞肺癌 73 例 (M/F: 59/14) 平均 62 歳を対象とした。臨床病期は全例画像所見により決定した。組織型は扁平上皮癌 38 例, 腺癌 30 例であった。プラチナを中心とした化学療法を平均 1.4 サイクル施行した。放射線を併用した 8 症例は除外した。化学療法の効果は CR: 0 例, PR: 21 例で奏効率 29% であった。術後 5 年間全例追跡した。【結果】pN 因子別の 5 年生存率は pN0 (30 例): 90%, pN1 (14 例): 57%, pN2 (21 例): 33%, pN3 (8 例): 0% であった。同時期に手術単独で完全切除し得た症例の 5 年生存率は pN0 (130 例): 71%, pN1 (32 例): 54%, pN2 (49 例): 42%, pN3 (4 例): 0% であった。術前化学療法を施行した pN0 症例 (30 例) と手術単独で治療した臨床病期 III 期-pN0 症例 (34 例) との 2 群間の検定では, 両群に性別, 年齢, 組織型, 腫瘍マーカー, T 因子などに差がないものの 5 年生存率は 90% vs 68% と術前化学療法を施行した pN0 症例の方が有意に良好であった ( $p = 0.0025$ )。【結語】pN0 症例が化療以前からリンパ節転移がなかったものと仮定した場合, リンパ節転移のない症例に術前化学療法の効果が期待できることが示唆された。